

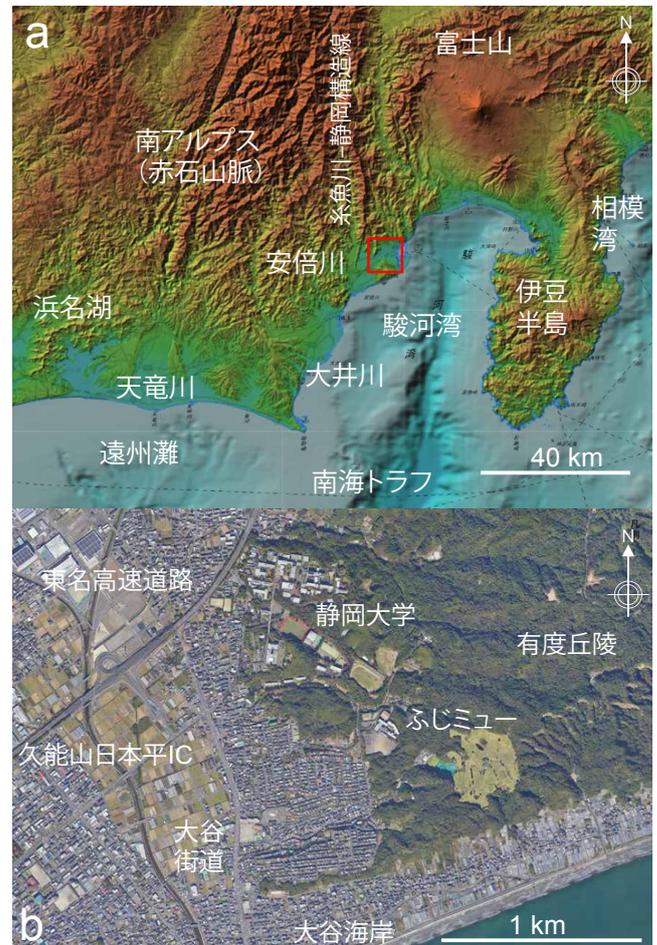
静岡県が創設した思考を拓く自然系博物館 “ふじのくに地球環境史ミュージアム”の歩き方

七山 太^{1,2}

1. はじめに

静岡県は首都圏と中京圏を結ぶ地域であり、有史以来、東海道を軸とした日本の交通や物流の骨幹をなしてきました。県内の随所から雄大な富士山を眺望できることから、“ふじのくに”とも呼ばれています。人口約360万人を擁するこの県は、155 kmに渡って東西に幅広く広がっています。JR東海道本線や国道1号線沿いの低地に連なる都市部以外の地域には、未だに広大で豊かな自然が残されており、東縁は伊豆半島と相模トラフ（相模湾）、南縁は駿河湾から遠州灘に連なる南海トラフもしくは太平洋、北縁は伊豆半島の衝突によって隆起した南アルプス（赤石山脈）の急峻な山々によって境されています（第1図a）。“ふじのくに”は日本の一地方に過ぎませんが、この地域のローカルな自然を端緒として、グローバルな視点で地球環境を考察することによって、国際的な研究成果の発信を目指す”という理念の基で、静岡県は自然史系博物館の新設を目指しました。その際、“百年後の静岡が豊かであるために”というテーマの元に“自ら思考するミュージアム”を目指ことになったのです（山田，2016；ふじのくに地球環境史ミュージアム学芸課（編），2021a, b）。

ふじのくに地球環境史ミュージアム（Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka）は、おそらく日本国内では新しい自然系の総合博物館と言えるでしょう。本館は「ふじミュージー」という愛称で呼ばれており、有度丘陵西麓の閑静な大谷地区の住宅地奥に立地しています。2013年に閉校した旧県立静岡南高校の校舎と敷地を再利用し、2016年3月に、長年にわたる県民の念願が叶って開館しました。そのため、館内の至るところに高校当時のモニュメントや雰囲気が残されています（第2図a）。このような廃校をリノベーションして誕生した博物館等の教育施設は地方の市町村ではしばしば見かけますが、県立のケースは珍しいと思います。ちなみに、学校の校舎をリノベーションして誕生した最も規模が大きな博物館としては、1999



第1図 (a) ふじのくに（静岡県）の地形図。国土地理院が提供する地理院地図の機能を利用して作成した。ふじミュージーの立地する有度丘陵を赤線の枠で示す。(b) 有度丘陵西方、静岡大学とふじミュージーの位置関係を示す。Google Earth 画像を基図として利用した。Image © 2024 Airbus.

年に開館した北海道大学総合博物館と2000年に開館した九州大学総合研究博物館の2つが挙げられると思います。

ふじミュージーには現在7名（定数8名：現在1名欠員）の自然科学分野（環境史、昆虫、脊椎動物、植物、古生物・古生態、地質・岩石・地震）の博士号を所持した常勤研究員が在籍しています。彼らは展示の企画や準備など、博物

1 産総研 地質調査総合センター地質情報基盤センター

2 ふじのくに地球環境史ミュージアム 〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷 5762

キーワード：ふじのくに地球環境史ミュージアム、自然系博物館、静岡県、静岡市駿河区、有度丘陵、駿河湾



第2図 (a) 旧静岡南高校当時の面影が残るエントランス。© 竹田武史。(b) 静岡市内のふじミュージアムと静岡大学の位置図、ならびにJR静岡駅や静岡IC、日本平久能山スマートICからのアクセス案内図。Google Mapを基図として利用した。ふじミュージアムと静岡大学の場所を赤線の枠で示す。

館の学芸的な活動を行うとともに、国際的な研究活動を行っている研究者でもあります。彼らの中には、静岡大学の客員教員を兼務している方もおられます。また、初代館長の安田喜憲先生や現館長である佐藤洋一郎先生は、静岡県からの依頼を受けて遠地から赴任して来られました。これらのことから、本館が国立科学博物館のような研究指向の強い博物館であることが理解できます。

また、近接する静岡大学静岡キャンパスや東海大学との結びつきが強く、大学の元教員や中学・高校等を退職された理科分野の先生方を客員研究員として広く迎え入れています。私も国立研究開発法人産業技術総合研究所(産総研)の退職後、ふじミュージアムに移籍し、本館所属の客員研究員として研究活動や普及活動を行っています。

館内にはNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークの事務局があり、創設時からふじミュージアムの運営に協力するとともに、県内の自然史に関する標本、資料の収集・保管、研究に関する事業や、自然環境教育に関する事業を行い、社会に寄与することを目的として活動されています(<https://www.spmnh.jp/> 閲覧日: 2024年9月30日)。

また、南アルプスにおける自然環境の保全や地域文化の継承を目的に静岡県が設立した南アルプス学会の事務局も館内に設置されています。

本稿ではふじミュージアムの見所について、ふじのくに地球環境史ミュージアム学芸課(編)(2021a, b)や山田(2016)に準拠し、私の視点からGSJ地質ニュースの読者のみなさま向けにご案内したいと思います。

2. ふじミュージアムへのアクセスと館内の基本情報

ふじミュージアムは、静岡県の中央部、静岡市南東部の駿河区大谷にあります。付近には静岡大学静岡キャンパス(以下、静岡大学)があり、共に有度丘陵西部に隣接して立地しています(第1図)。館に関する詳しい情報は、ふじミュージアムのホームページに記載されています(<https://www.fujimu100.jp/> 閲覧日: 2024年9月30日)。

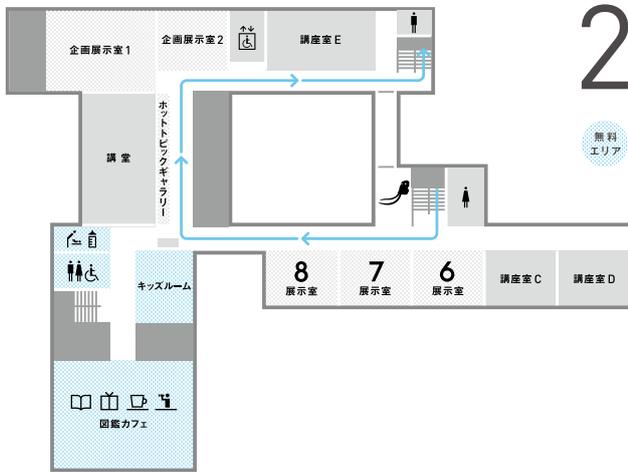
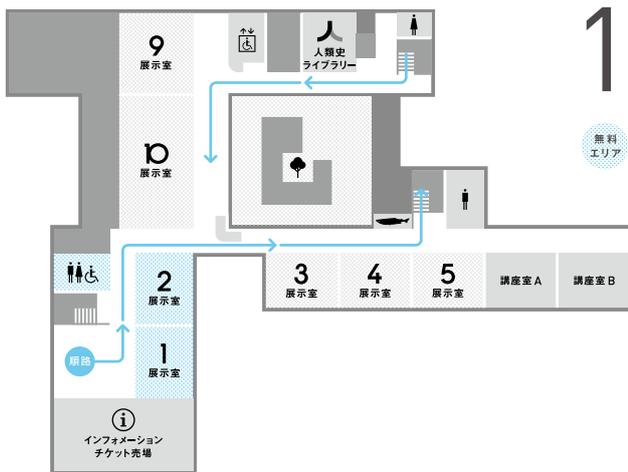
ふじミュージアムへの直通バス(しずてつジャストライン)は、JR静岡駅北口バスターミナル8番乗り場より、美和大谷線「ふじのくに地球環境史ミュージアム」行き(番号37, 38)に乗り、終点下車が最も便利です。所要時間約30分程度です。但し便数は限られており、概ね1時間に約1本程度なので、あらかじめ静鉄バスのホームページに掲載された時刻表をご確認されることをお勧めいたします(<https://transfer.navitime.biz/justline/pc/diagram/BusDiagram?orvCode=00250695&course=0004700688&stopNo=1> 閲覧日: 2024年9月30日)(第2図b)。なお、静岡大学周辺までは比較的バスの便数が多いので、脚力に自信のある方は、静大片山のバス停で下車後、キャンパスの坂道を図書館下まで登って、グラウンド横もしくは農学部を經由して本館まで20分ほど歩く選択肢もあります(第1図b)。

タクシー利用であれば、JR静岡駅南口タクシー乗り場より、所要時間約20分(約6.1km)程度です。自家用車利用であれば、東名高速道路の日本平久能山スマートICから一般道に下り、大谷街道を南下し、井庄の交差点を左折して坂道を上り、5分程度で到着します。途中で、「ふじのくに地球環境史ミュージアム」方面の看板が何か所か出されているので、それに従ってください(第2図b)。構内には、広い駐車場が完備されています。

3. 館内の展示室のご案内

本稿では、初めてふじミュージアムに来館された皆さま向けに館内の歩き方をご紹介します(第3図)。

館内案内図



第3図 館内案内図。本稿中に示された館内の見学順路は、水色の矢印で示されている。©ふじのくに地球環境史ミュージアム。

本館では、デジタルカメラやスマートフォンを使った撮影は可能です。但し、フラッシュ撮影は不可です。常設展示については、無料音声ガイドが導入されています。来館者自身のスマートフォンでQRコードを読み取りご自身のイヤホンで聴き取る形式です。ふじミュージアムでは、展示室スタッフやミュージアムサポーター（ボランティア）が館内で活躍しています。ぜひ、ご来館の際は、彼らに話しかけてみてください。

全体を通して、ふじミュージアムの展示では、学習机や椅子を展示台に活用したり、黒板を使ったディスプレイなど高校当時の雰囲気を残しつつ、来館者が“自ら思考する”ことを意図した展示が行われています。その一方で、一般的に美術館は、館内に展示された絵画や彫刻に相応しい洒落たデザインのところが多いですが、博物館は百花繚乱で、狭くて雑然とした印象を受けるところが多いかと思えます。本館の場合、展示室や展示物はデザインが重視されており、



第4図 「地球史の旅」と表示された見学順路を示す標本箱。©ナカサ&パートナーズ。

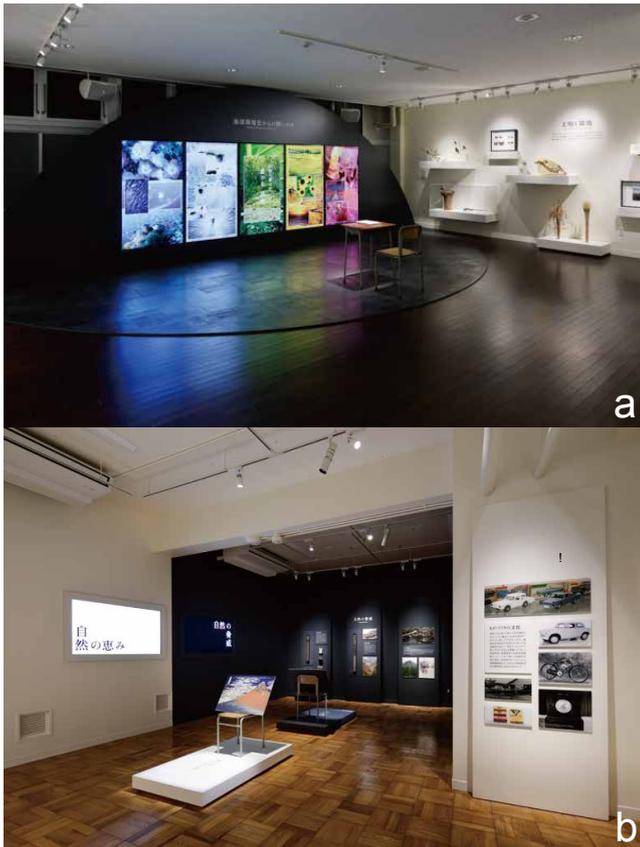
既に国内外でさまざまなデザイン賞を受賞しています。各展示室のデザイン・施工は、株式会社丹青社が担当しました。

展示物に関する解説文は、総じて短い文章にまとめられています。フォントの色もサイズも控えめです。これは、展示室に散りばめられたキーワードから、ご自身で考えていただくことを意図されているとのこと。

これまでの博物館の多くは、単に“知識を教える場”であることが前提とされてきました。しかし、現在の便利な世の中では、単に知識を得たければ、自宅でインターネット検索の方が遥かに効率的なのです。さらに、この仕掛けによって、必然的に来館者は、展示室スタッフやミュージアムサポーター（ボランティア）と会話する機会が増えることになるのです。

各展示室前の廊下には、「地球史の旅」と表示された見学順路が示された標本箱（約30cm×20cm程度）が設置されています（第4図）。展示室を廻る200mの廊下を46億年の地球史に例え、この間に地球上に起きた事件を17回に分けて標本箱に収めています。約46億年前に誕生した地球のはじまりを1月1日、現在を12月31日と仮定した場合、生物や人類の誕生はいつ頃になるのでしょうか？来館者は標本箱を順路で追うことで、地質学的な時間経過を客観的に理解できる仕掛けになっています。

正面玄関を入ってすぐのエントランスには、インフォメーション（チケット売り場）があり、まずここで観覧券を購入します。付近にはコインロッカーもあるので、見学中に荷物を預けることが可能です。



第5図 (a) 展示室1「地球環境史との出会い」の室内。©ナカサ&パートナーズ。(b) 展示室2「ふじのくにのすがた」の室内。©ナカサ&パートナーズ。

(1) 展示室1「地球環境史との出会い」

展示室1はエントランス前にあります(第5図a)。「地球環境史との出会い」をテーマとした常設展示であり、黒板をイメージしたディスプレイの設置されたオリエンテーション的な内容となっています。ここでは“地球環境史とは何か? ”、“海や大地に刻まれた記録は?”に関する地球環境史全般について学びます。

(2) 展示室2「ふじのくにのすがた」

展示室2は、部屋の半分が白色、もう半分が黒色に塗色されている「ふじのくにのすがた」を解説した常設展示です(第5図b)。この色の違いは、“自然界の持つ二面性”を意味します。例えば、富士山は美しい観光スポットとして知られていますが、その反面、活火山としての危険性を伴う厄介者でもあるのです。このような“自然からの脅威と恵みは、表裏一体のものである”ということを理解することを展示目的としています。

(3) 展示室3「ふじのくにの海」

展示室3は部屋の下半分が青色で塗色されています。こ

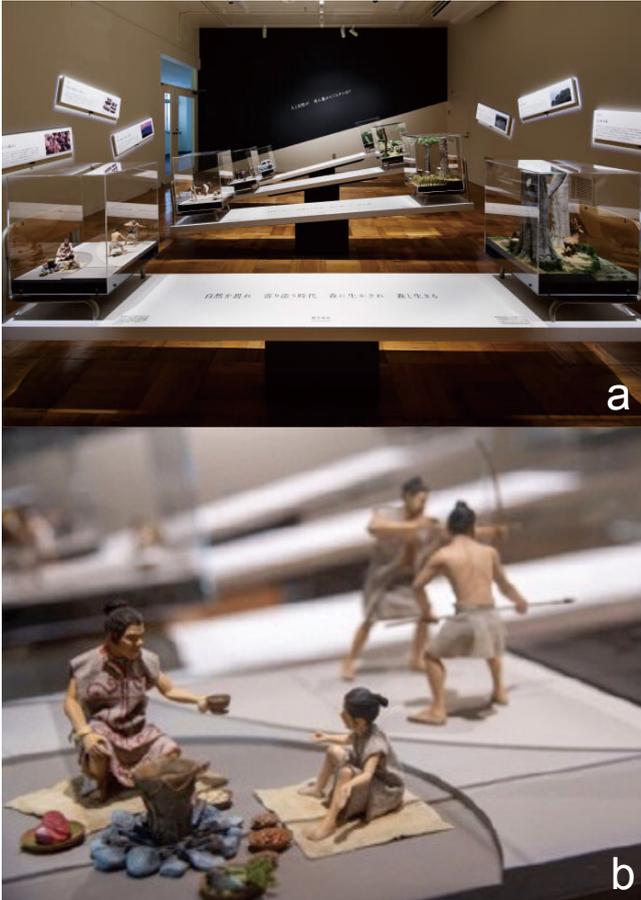


第6図 (a) 展示室3「ふじのくにの海」の室内。©ナカサ&パートナーズ。(b) 展示室4「ふじのくにの大地」の室内。©ナカサ&パートナーズ。

こは「ふじのくにの海」の中の環境史や多彩な海棲生物の標本を展示している常設展示です。室内の中央には、学校の机を縦に積み重ねたスタイリッシュな展示ケースが並んでいます(第6図a)。例えば、最大水深2500m近くに達する駿河湾は、日本一深い湾であることが知られています。湾内から約1000種の魚類が確認されており、ここには日本の22%の多様な種が生息すると言われています。駿河湾の深部からは、今後も新種が発見されることが期待されています。

(4) 展示室4「ふじのくにの大地」

展示室4は、「ふじのくにの大地」の生態系の食物網(食物連鎖)を表現した大きなテーブルが設置されている常設展示です(第6図b)。“食う vs 食われる”の相互関係を、標本を白い矢印で結ぶことによって里山生態系の食物連鎖を表現しています。椅子に着席することによって、人間もこの食物連鎖に含まれることが理解出来ます。展示室4の前に設置されている駿河湾産の深海ザメの一種であるオンデンザメの標本は、幼魚ながら全長2.8mに達するもので、貴重な標本です。



第7図 (a)展示室5「ふじのくにの環境史」の室内。©ナカサ&パートナーズ。(b)縄文時代の生活を示す精巧なジオラマ模型。

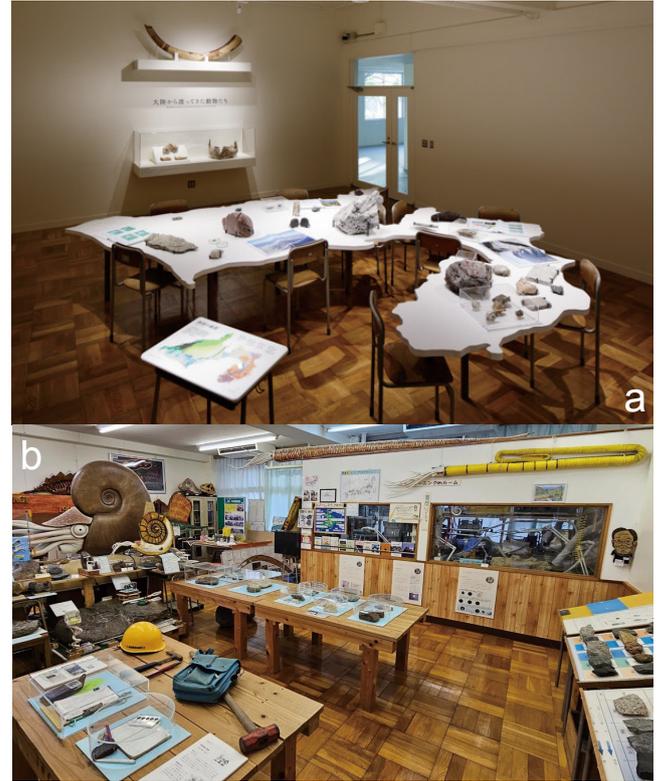
(5) 展示室5「ふじのくにの環境史」

展示室5「ふじのくにの環境史」は、人の暮らしと自然を表すジオラマ模型をシーソー上に対で配置し、縄文時代から現代に至る歴史の中で、ふじのくにの住民と自然の関係が、どのように変化してきたのかを学ぶ常設展示です(第7図a)。この部屋のジオラマは、たいへん精巧に出来ています(第7図b)。時代と共に変化する人々の表情を観察してみてください。また、自然の中に隠れた小さな生物を探し出してみてください。

(6) 展示室6「ふじのくにの成り立ち」

展示室6は、階段をあがった2階にある「ふじのくにの成り立ち」に関する常設展示です(第8図a)。中央に置かれた静岡県をかたどったテーブルの上に化石や岩石・鉱物を配置し、大地の成り立ちを考察するような展示となっています。県内各地から産出する岩石、鉱物、化石が、「ふじのくにの成り立ち」を語っています。

静岡県の北部には、プレート運動によって生じた付加体からなる南アルプス(赤石山脈)の山々が聳えています。南



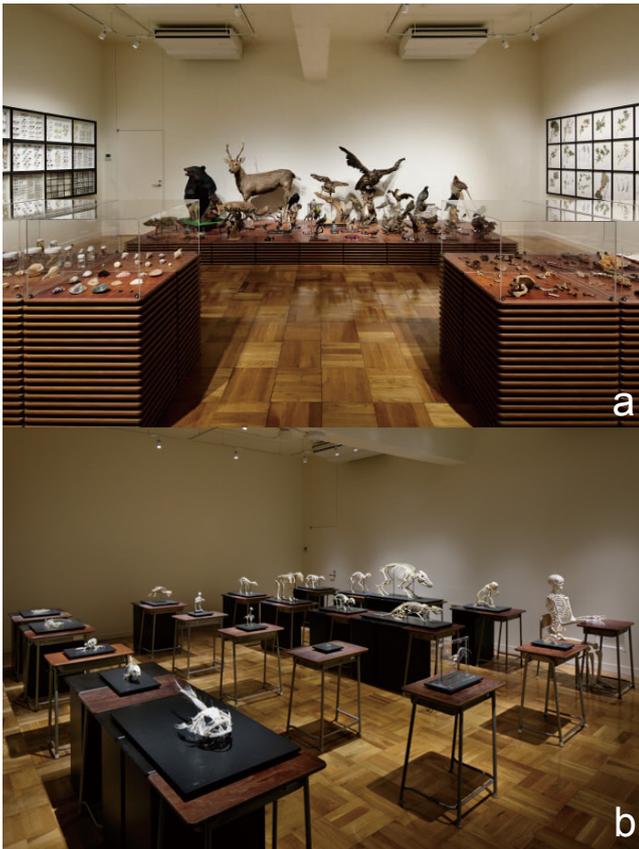
第8図 (a)展示室6「ふじのくにの成り立ち」の室内。©ナカサ&パートナーズ。(b)ミドルヤードの風景。

アルプスには、3000 mの標高を持つ急峻な山々が隆起を続け、この地域が大井川や安倍川の源流となっています。

東部には第四紀火山が多く分布し、富士山、箱根山、伊豆東部火山群が現在でも活動しています。そして、既に活動を終えた伊豆弧の火山が伊豆半島の大地を造り上げました。また、伊豆半島は、本州の中で唯一フィリピン海プレート上にあり、プレート運動によって本州弧に衝突しました。その結果、プレート境界である駿河トラフや相模トラフの延長線上に富士山が形成されたのです。一方、県の南西部は比較的なだらかで、台地や低地が多くなっており、本州最大級の海跡湖である浜名湖があります(第1図a)。

最も重要なことは、静岡県の東部には、本州を東西に分断する大地溝帯“フォッサマグナ”があり、その西縁の境には現在も活動的な断層である糸魚川-静岡構造線が南北に走っている点です。日本で最も高い富士山と日本で最も深い駿河湾を合わせ持つ静岡県は、6000 mの標高差を保持する活動的な地域なのです。静岡県の地形や地質の成り立ちを理解することによって、豊かな生態系を生み出してきた静岡県の自然環境について、理解出来ることでしょう。

展示室6の隣には、研究員・NPOの活動が見られるミドルヤードがあります(第8図b)。本館において、展示スペースなどとして一般公開されているスペースは、全体の



第9図 (a) 展示室7「ふじのくにの生物多様性」の室内と机の天板を積み重ねて造られた展示台。©ナカサ&パートナーズ。(b) 展示室8「生命のかたち」。様々な骨格標本が、進化系列に応じて並べられている。©ナカサ&パートナーズ。

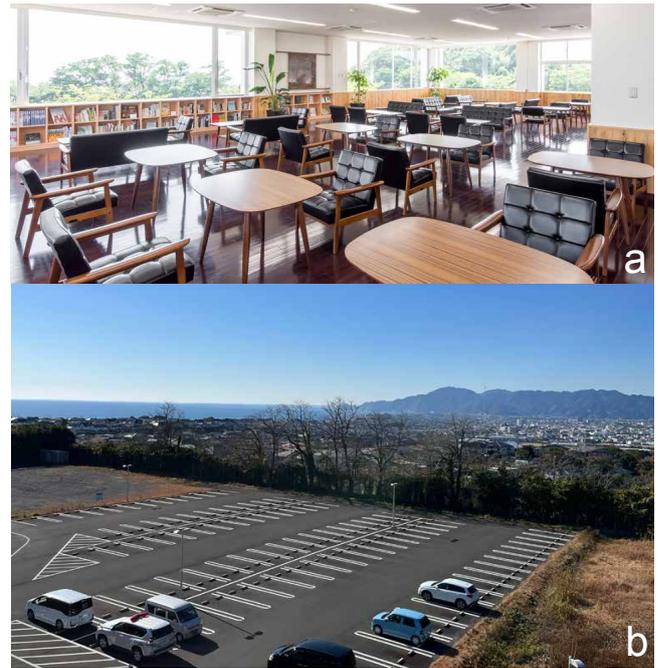
約30%程度です。残りの70%はバックヤード(収蔵庫と研究スペース)になっており、一般の方は立ち入ることはできません。その代わりに、その雰囲気に触れられるスペースをミドルヤードと称して公開しているのです。タイミングが良ければ、ここで化石クリーニングや生物標本を作っている研究員やNPOの方の作業を見学することもできます。

(7) 展示室7「ふじのくにの生物多様性」

展示室7は、「ふじのくにの生物多様性」を、ふじミュージアムが収集した多くの標本を使って紹介している常設展示です。ここには多種多様な生物の標本が並べられており、南アルプス、富士山、伊豆半島、駿河湾など変化に富んだふじのくにの自然環境が、豊かな生態系を育てていることを学ぶことができます(第9図a)。なお、本館が収蔵する標本の数は100万点にもおよび、展示物はその一部です。

(8) 展示室8「生命のかたち」

展示室8「生命のかたち」は、生徒に見立てた20体の骨



第10図 (a)「図鑑カフェ」の室内。©竹田武史。(b)カフェから望む駿河湾の眺望。

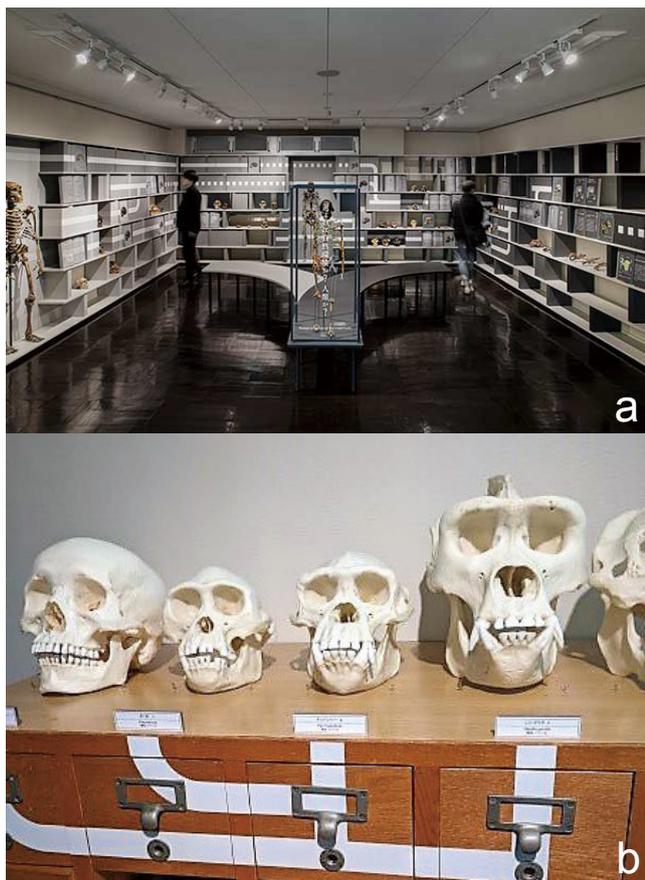
格標本が、整然と机と椅子に置かれて展示されている常設展示です(第9図b)。この中にはヒトの骨格標本も含まれています。魚類、鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類の脊椎動物の骨格標本の比較から、進化の成り立ちを学ぶことができます。

(9) 駿河湾が望める「図鑑カフェ」

2階には、「図鑑カフェ」があります(第10図)。この部屋からは南アルプスから駿河湾までが一望でき、館内最高の眺望を誇る人気スポットです。室内には絵本や図鑑が配架されており、手に取って見ることも出来ます。また、併設されているミュージアムショップ「ペルチ」では、飲み物、お菓子、軽食、ミュージアムグッズなどを販売しています。なお、外から持ち込んだ物をカフェで飲食することは禁止されています。また、館の周辺にはコンビニはありません。

(10) 展示室「人類史ライブラリー」

「人類史ライブラリー」は、2022年に加わった常設展示です(第11図)。この展示では「選択」をキーワードに、地球環境の変化とともに人類が歩んできた進化の道りが紹介されています。なお、静岡県浜松市で発見された旧石器時代の人骨化石、浜北人の復元骨格模型は、この館にしかない貴重な標本の一つです。



第11図 (a)展示室9「人類史ライブラリー」の室内。©栗原 平。
(b)人骨標本の展示。

(11) 展示室9「ふじのくにと地球」

展示室9は、「ふじのくにと地球」をテーマとして地球家族会議が開催されている対話型の展示室です。ここでは来館者は会議の参加者となり、平日2～6回、土曜・日曜は6回、SDGsについて20分ほど意見交換を行います(第12図a)。会議のテーマは、水、食料、金属資源、生物多様性など、毎回異なります。

会議の進行は、14名のミュージアムインタープリター(展示交流員)が交代で担当します。彼らの専門は、動物、植物、エコ活動、化学、岩石、地球科学、技術、幼児教育など多様です。彼らの進行のもと、参加者がテーブルを囲んで、百年後の地球や静岡県の抱える7+1の地球環境リスク(ふじのくに地球環境史ミュージアム学芸課(編), 2021b)について学びます。その後、“このまま生活していくと、地球がどうなってしまうか?”を参加者間で意見を出し合います。

(12) 展示室10「ふじのくにと未来」

地球家族会議終了後、「ふじのくにと未来」について、“心豊かに暮らすとはどういうことなのか?”というテーマに



第12図 (a)展示室9「ふじのくにと地球」において開催される地球家族会議の風景。©ナカサ&パートナーズ。(b)展示室10「ふじのくにと未来」の展示。©ナカサ&パートナーズ。

ついて、私たちが今できることを各自で思考する場が展示室10です(第12図b)。なお、展示室10では、茨城県つくば市にある国立研究開発法人国立環境研究所の協力を得て“地球温暖化への適応”に関するパネル展示が行われています。

(13) 企画展示室と講堂

2階には企画展示室が2室あり、企画展が行われます。また、その隣にある講堂では、講演会などが不定期で開催されています。

(14) その他の館内情報

ふじミューの3階には図書室があります。アクセスには、人類史ライブラリー横に設置されたエレベーターを利用すると便利です。ここには静岡県内の自然史に関する約8万点の図書資料が所蔵されており、自然史・環境史に関する専門書のほか、各種学術雑誌や普及書、報告書を収蔵しています。この図書室では一般向けの貸出は行っていませんが、毎月第3日曜日(10:00～17:00)を図書室開放日としており、室内での閲覧が可能です。



第 13 図 自然観察路「生物多様性のみち」のルートと主な観察対象。原図は、NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークの横山謙二氏とふじのくに地球環境史ミュージアムの青木真理子氏が作成した。

2 階の図鑑カフェの横には、0 才～小学校低学年を利用対象としたキッズルームがあります。ここは木のおもちゃが充実した無料開放スペースであり、インターネットで予約すればどなたでも利用できます。キッズルーム横の講堂前の廊下には、本館に所属する 7 人の研究員が、3 か月ごとに持ち回りで企画展示するホットトピックギャラリーのコーナーがあります。

(15) 自然観察路「生物多様性のみち」

高校当時、裏山には生徒たちによって整備された散策路がありました。ここを自然観察路「生物多様性のみち」として再整備し、季節毎の観察会のほか、原則毎月第 3 日曜日に一般開放しています(第 13 図)。全長約 400 m の自然観察路内では、300 種以上の植物、昆虫や野鳥が観察出来ます。また、ふじミューの立地する有度丘陵が、かつて安倍川によって運ばれてきた土砂でできていることを示す地層(露頭)を観察することができます。但し、自然観察路を訪れる際は、スニーカー、長袖・長ズボン等の着用をお薦めします。

謝辞：ふじのくに地球環境史ミュージアムには、館内の写真と図面の使用を許可していただきました。心から感謝申しあげます。

文 献

- ふじのくに地球環境史ミュージアム学芸課(編)(2021a)
ふじのくに地球環境史ミュージアム コンセプトブック(第 3 版)。104p.
- ふじのくに地球環境史ミュージアム学芸課(編)(2021b)
百年先 地方博物館の大きな挑戦。静岡新聞社、192p.
- 山田和芳(2016)ふじのくに地球環境史ミュージアム紹介。
社会地質学会誌, 12, 41-44.

NANAYAMA Futoshi (2025) How to walk around "Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka, as a self-directed natural history museum founded by Shizuoka Prefecture, central Japan.

(受付：2024 年 10 月 1 日)